

ふるさとの林の歌

小川未明

青空文庫

むすめ まいにちやま
娘は毎日山へゆきました。枯れ枝を集めたり、また木の実を
ひろ
拾ったりしました。

そのうちに、雪が降って、あたりを真っ白にうずめてしまいま
した。娘は家の内で親の手助けをして、早く春のくるのを待った
のであります。それは、どんなに待ち遠しいことでありますで
しょう。やがて、物憂い、暗い冬が、北へ、北へとにげていきま
した。

春になると、雪がだんだん消えてしまいました。野にも、山に
も、いろいろな花が咲きました。その季節が過ぎると、山には、
みどり
こんもりとした緑の葉がしげって、暖かな心地よい風が岡にもふ

もとにも吹き渡りました。大空は美しく晴れて、うららかな日の光がみなぎったのであります。

娘は、朗らかな声で歌をうたいながら、山へ入ってゆきました。春、夏、秋、冬はこうして過ぎました。そして、娘は、だんだん大きくなつたのであります。

ある日のこと、娘は、山の林の中へいつものごとく入ってゆきました。すると一羽のかわいらしい小鳥が、いい声で鳴いていました。彼女は、しばらく立ち止まって、その小鳥の枝に止まって鳴いているのを見守っていましたが、

「ああ、なんというかわいらしい小鳥だろう。あの真っ黒な目のきれいなこと、ほんとうにほんとうにかわいらしいこと。」と、

彼女かのじよはいいました。

すると、この言葉ことばを聞きつけて、小鳥ことりは歌うたをやめて、じつと娘むすめの方ほうをながめていました。

「どうか私わたしをかわいがってください。」と、小鳥ことりはいいました。

「私わたしは、兄きょうだい 弟だいも、姉妹しまいもない独りひとりぼつちなのです。毎日まいにち、

この林はやしの中なかをさまよつて、独りひとりでさびしく歌うたっています。」と、

小鳥ことりはつづけていいました。

娘むすめは、小鳥ことりのいうことを聞きくと、

「かわいい小鳥ことりさん、私わたしは、かわいがつてあげますよ。しかしど

うして、そんなにおまえさんの目めは、すきとおるように美うつくしいん

でしょう。」と問といました。

「それは、私は、生まれてから、まだ、汚いものを見たことがないからです。死んだお母さんは、私に向かつて、けっして、町の方へいつてはならない。もし町の方へ飛んでいつて、そこでいろいろなものを見ると、おまえの目はそのときからにごつてしまう。また光を失つてしまう。おまえは、この青々とした松林と清い谷川の流れよりほかに見えてはならない。もし、わたしのいうことを守れば、おまえはいつまでも若く、美しいと申しました。」

「まあ、おまえさんは、そのお母さんの仰せを守っているのですか。」と、娘は小鳥を見つめました。

「さようでございます。私のお友だちは、町の方へ飛んでゆきま

した。そして、いったぎりで帰かえつてこないものもあります。また、
 帰かえつてきて、しばらくこの林はやしなかの中に止とまつていたものもあります
 が、長ながくはしんぼうがしきれずに、ふたたびかなたの空そらを慕したつて
 飛とんでゆきました。こうして出でかけていったものも、それきり帰かえ
 つてきませんでした。」と、小鳥こどりは答こたえました。

「それで、町まちを見みてきた、お友ともだちの目めの色いろはにごつていまし
 か。」と、娘むすめは、熱ねっしん心にききました。

「それは、私わたしにはわかりません。けれど、たえず、その目めの中なかに
 は、ちらちらとおちつかない影かげのようなものが漂ただよっていました。
 そして友ともだちの話はなしには、町まちで見みた美うつくしかったもの、不思議ふしぎなもの、
 また怖おそろしかったものが幻まぼろしに見みえてしかたがないといつていまし

たから、多分たぶん、そんなものに心が脅こころおびやかされているのだらうと思おもいます。」

娘むすめは、じつとそこに立ち止とどまって小鳥ことりのいうことをきいて、考かんがえこんでいました。

「ああ、私わたしも、まだ町まちを見みたことがないの。」と、ため息いきをもらしながら、いいました。

「私わたしは、けっして町まちを見みません、お母かあさんのいいつけを守まもって、この林はやしの中なかで一生しょうを送おくろうと思おもっています。どうぞひとりぼっちの私わたしをかわいがってください。」と、小鳥ことりは願ねがいました。

娘むすめは、やさしい目めつきで小鳥ことりをながめながら、

「ほんとうにおまえの目めはかわいい、美うつくしい目めだこと。」と、見み

とれていました。

「どうか私わたしをかわいがってください。そうすれば、私わたしは、あなたになんでもさしあげます。この翼つばさも、この声こえも、この目めもみんなあなたにあげます。どうぞ私わたしをかわいがってくださいまし。」と、小鳥ことりはたのみました。

「ほんとうにやさしい小鳥ことりだこと。私わたしは、どんなにおまえさんがかわいかしれない。私わたしは、なんにもほしくないが、ただおまえさんの目めのように美しい目めがほしい、そうしたら、私わたしは、どんなに美しくなることでしよう。」と、娘むすめは、うつとりとして心こころの中なかで自分の姿じぶんすがたを空想くうそうに描えがきながらいいました。

小鳥ことりは、しばらく頭あたまをかしげていましたが、

「わたしめ、つばさ、私の目も、翼も、また声も、そして大事な命も、みんなあなたのものです。私は、これから、あなたの胸の中に生きています。」と
 いいました。

「ああ、うれしいこと。」

「わたしは、もつと、もつと、なんでもあげたいのです。けれど、もうこれよりはほかに持っていないません。そして、この林の中には私の命より貴いというほどのものはないようであります。私は、いちばん大事にしていたものをみんなあなたにあげてしまいます。どうか、あなたは、毎日のように、この林の中へきて、私を思い出してください、いつまでも思い出してください。そして、いい声でうたってください。きつとあなたは、いい声が出ます、そ

して、私の生まれて死んだ、この林を、いつまでも見捨てないで
 ください。そうでしたら私は、どんなに幸福でありましょう。
 私は、いつまでもあなたの胸の中に生きています。私の小さな赤
 い心臓は、あなたの心に宿って呼吸しています。」と、小鳥
 はいいました。

「もし、そんなことができたら。」と、娘は、小鳥を輝く瞳で見
 上げました。

「ほんとうに美しいと行って、おまえの目より美しいものがこの
 世界にあらうか、なにがいい音色だといって、おまえの鳴く声よ
 り美妙なものがこの世界にあるはずがない。」と、娘はため息
 をもらしました。

「わたしはいつまでも、この林の中で、うたつて暮らします。そして、

おまえのことを毎日思うでありますよ。」

「どうか、私を永久に愛してください。」

「また、明日、おまえと楽しく話をしましょうね。」と、娘はいました。

そして、翌日、娘は小鳥と約束をしたように、林の中に入

ってゆきました。彼女は、たまたま立ち止まって耳を傾けまし

た。いつものいい小鳥の鳴き声が耳に聞こえてこないかと思つた

からです。けれど、あたりは、まったくしんとしていました。木

々のこずえに当たる風の音が聞こえるばかりでありました。

「どうしたのだろう。」と、娘はいぶかりました。

きよう 今日、この林はやしの中なかでまたあう約束やくそくをしたのに、小鳥ことりは、もはやわす忘れてしまったのだらうか。いや、あの鳥とりにそんなことのあるはずがない。娘むすめは胸むねの騒さわぎを感じかんました。もしやと思おもつて、彼かのじよ 女によは、昨日きのう小鳥ことりと話をした木きの下したに走はしつてゆきました。するとそこには、かわいらしい昨日きのうの小鳥ことりが冷つめたくなつて地ちの上うへに落おちているのを見みました。

彼かのじよ女によは、その小鳥ことりの屍しかばねを拾ひろい上げて、しつかりと胸むねに抱だきました。

「おまえのいったことはうそではなかつた。みんなほんとうのことであつたのだ。そして、おまえは、私わたしのために死しんでくれた。しかし、今日きようからはおまえは私わたしの胸むねの中なかに生いきるであらう。それ

でも私は、ほんとうにさびしくなった。もう、おまえと話を^{はなし}する
 ことができなくなつてしまつた。「といつて、娘は、熱い涙と、
^{むすめ} ^{あつなみだ}
 息を、冷たくなつた小鳥の屍に吹きかけました。

小鳥のいつたことは、みんなほんとうだったのであります。娘
^{ことり}
 は、だんだん美しくなりました。その目は清らかに黒みを帯^おんで、
^{うつく}
 その声はますます朗らかに、その髪^{かみ}の毛^けは、つやつやと輝^{かがや}いたの
^{こえ}
 であります。

彼女^{かのじよ}は、風の吹^{かぜ}く日^ひも、また、日^ひの照^てる穏^{おだ}やかな日^ひも、山^{やま}の
^{はやしなか} ^{はい}
 林^{はやしなか}の中^{はい}に入^{はい}つていつて、さびしく独^{ひと}りでうたつていました。ある
^ひ
 日^ひのことです。一羽^わの見慣^みれない小鳥^{ことり}が妙^{みょう}な節^{ふし}で木^きに止^とまつて歌^{うた}
^{むすめ}
 をうたつていました。娘^{むすめ}は、いままでこんな不思議^{ふしぎ}な歌^{うた}をきいた

ことがありません。

「おまえのうたっている歌は、なんとという歌なの。」と、彼女
は、その見慣れない小鳥に向かつて問いました。

小鳥は、歌をやめて、じつと娘の顔を見ていましたが、

「私は、この歌を町から覚えてきました。」と答えました。

娘は、小鳥の答えを聞くとびつくりいたしました。あのかわいらしい、死んだ小鳥が、母親のいいつけを守つて、一生町を見
ずにしたことを思い出したからであります。また、町へいつ
たものは、目の色がにごるといった話を思い出したからでありま
す。

「町つて、どんなところなの？」と、娘は、町を怖ろしいところ

と思おもいながら聞ききました。すると、その紅あかい羽はねの混まじっている小こ鳥とりは、

「それは、こことは、まるでなにもかも違ちがっています。町まちには美うつくしい家いえがたくさんあります。また、美うつくしい人にんげん間かんがたくさん歩あるいています。にぎやかな、車くるまや、馬うまが、いつも往おう来らいの上うえを通とおっています。そして、そこには、なにもないものはありません。世界せかいじゆうめの珍めづらしいものが、みんなそこに集あつまっています。この林はやしの中なかにある赤あかい木きの実みも、なしの実みも、また丘おかにあるくりも、畑はたけにあるかきの実みもないものはありません。私わたしは、それを見みてきました。そして、まだ町まちを見みない友ともだちにそのことを知しらしてやろうと思おもって帰かえってきたのです。二年ねんぜん前ぜんに別わかれた友ともだちを探さがしてい

るのですが、その友だちが見つかからないので、いまこの木に止まつて、町で覚えてきた歌をうたったのです。」と、その鳥はいいました。

「そんなに、その町というところは、美しいところなの？」と、娘はたずねました。

彼女は、その小鳥の歌が、なんだか自分まで誘惑するようなきもちがしたのです。

「それは、きれいなところです。一度町を見なければ、この世の中を見たといわれません、ただ、困ったことに、私は、昔、この林でうたった歌の節を忘れてしまいました。よく友だちが歌った、あの歌です。せつかく友だちを呼ぼうと思つて呼ぶことができま

せん。」と、小鳥は当惑そうにいいました。

娘は、このときじつとその小鳥を見上げていましたが、

「じゃ、私がうたつてあげましょう、この林の歌を忘れるなんて。

さあよくおききなさい。

わたしの友だちは、

谷川に、山に、林。

雲は美しいけれど、心が知れず、

雪は冷たいけれど、白くて潔し。

四方の空に、風騒ぐも、

私の嘴が出る、声は乱れず。」

娘は、いい声でうたいました。すると、黙って聞いていました

こずえの小鳥は、

「ああ、その声こえにきき覚えおぼがあります。忘わすれていた昔むかしのことがす
っかり見みえるようです。ああ、私わたしのこの小ちいさな心しんぞう臓ぞうがふるえる

……。」

こういったかと思おもうと、木きからばたりと落おちてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年12月

※表題は底本では、「ふるさと
の林《はやし》の歌《うた》」
なっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ふるさとの林の歌

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>